

入浴と神話 —古代ギリシャ文学を中心に—

大橋 絵理

長崎大学言語教育研究センター

Taking a Bath and the Greek Myth

Eri OHASHI

Center for Languages Studies, Nagasaki University

Abstract

This paper studies the relation between the water, especially taking a bath and the Greek Myth. In *Iphigenia in Tauris* of Euripides, the human sacrifice who proves the obedience to the gods to receive the divine favor, must be soaked in water. The Ancient Greek believed that the water drove away human impurity and sins. However this ceremony with the water was only a passive act for sacrifice's body. In *Odyssey* of Homer, Odysseus takes willingly and often a bath. When he is tossed by the will of gods in the first half of the story, the mysterious power of goddess Atene who protects Odysseus is shown sufficiently at the moment of his bathing. But when he regains a king of Ithaca by his will in the second half of the story, the power of Atene weakens, and the women's, for example, his wife's and his nurse's, brightness appears. This tendency of the progress from the mythic power to the human intellect in the situation of bathing becomes clear after the Ancient Greek age. This subject will be the next analysis.

Key Words: water, take a bath, Greek Myth, Homer, *Odyssey*

1. はじめに

水に関係する神は、世界中のあらゆる神話に登場すると言っても過言ではない。ギリシャ神話で、海を支配するポセイドンは最高神ゼウスの兄弟であり、すべてのものを引き裂くことができるトリアイナ（三叉の矛）を自在に操り、嵐や津波で陸地を沈

ませるといふ絶大な力を持つ¹。また、『古事記』の中には海神（わたつみ）という海を司る神についての記述があり、日本国内に海神を祭った多くの神社が現存している。中国では四海（東海、西海、北海、南海）を治める4人の龍王が海底の水晶宮に住み、雨や嵐を操るとされていた。そのため、海の付近だけではなく、河や湖の近辺にも竜王を祭る廟があり、竜王に雨を祈願する祭も古代から行われている。

特に病気の治癒効果がある温泉の発見は世界中で神話と関連づけられてきた。例えば日本では、山の中で傷ついた動物が入っている水溜が温かく人の身体も癒すことを猟師や村人が発見したという伝説が各地に残っている。稲荷信仰があるように、山の動物は同時に山の神の使いとして人間を守り、様々なことを教えてくれると信じられてきたのである²。奇跡や魔術を信じた古代ヨーロッパの人々の間でも大地から湧き出る神秘的な水は、神々からの贈り物だと考えられていた。日本でも古い温泉に小さな仏像が置いてあったり、浴場の壁に仏教の天武の絵が描いてあったりするように、ヨーロッパの浴場の壁にもギリシャ神話の神々の絵が見られ、大きな浴場には神殿が造られていた。

世界における入浴と神話に関する研究に関して、アルヴ・リトル・クルーティエは文化としての入浴に注目し『水と温泉の文化史』³で、水に関わる世界の神話とその儀式からどのように温泉入浴の治療が誕生したかを概観し、さらに絵画及び映画における水のモチーフを考察している。また、ウラディミール・クチュリフは、『世界温泉文化史』⁴で、古代から中世の入浴制度の変遷、温泉治療法の歴史に言及している。しかし、文学における入浴と神話の関係について触れている著作はほとんどないと言ってよいだろう。本稿では、まず、古代ギリシャ文学における水と神話の関係、次いで入浴にまつわる神秘性について考察していく。

2. 水の二面性

オリンポスの神話では、カオスから大地ガイア、夜ニュクス、冥界エレポス、水界ポントスが生まれたと書かれている。つまり、最初にこの世界に生まれてきたもののひとつは水だったのである。ガイアは天空ウノーラスを産み、そのウノーラスと交わり産んだのが、地の果てに渦巻く架空の海洋であるオケアノスであった⁵。古代ギリシャ人達は地球を平らで、大地も海も空もつくる果てに、さらに別の海があると考えていた。その後ガイアがニュクスとの交わりで産んだのが陽の光ヒューペリオンである。水はポントスとオケアノスの両方に満ちており、それらが光よりも先に生まれたということは古代ギリシャ人達がいかに水を重要であると考えていたかの証左であろう。

古代ヨーロッパの神話の世界では、水は二つの側面を持つ⁶。まずひとつの側面を見てみよう。スラブの神話にでてくるヴィーラは溺死した女性の霊魂であるために水

の中に住み、月光の中で踊る姿を見た人物を水の中に引きずり込むと言われていた⁷。また世間に広く知られている魚の尾を持ったマーメイドは「死の女神」とも考えられ、海で死んだ人の靈魂を受け入れたり、船に乗っている人々を海に引きずり込んだりしたと言い伝えられていた⁸。古代ギリシャで紀元前8世紀ごろに書かれたホメロスの『オデュッセイア』の中で、オデュッセウスが漂流した先のひとつに魔女キルケーの島がある。彼女はイタケーに帰りたいというオデュッセウスの願いを聞き届け、彼を航海に送り出すが、セイレーンの島についての注意を与える。

この女（セイレーン）達は、誰であろうと近づく者をみんな魔法にかけて魅了してしまうのです。知らずに近づいて、セイレーンたちの歌を耳にした者には、誰でも家に帰って妻や小さな子供たちに会うことも、その帰国の喜びに接することもできず、いいえセイレーンたちは野原に座ってその呪わしい歌で魅了し、そのまわりには朽ち枯れた骨がうず高く、しばんだ皮が骨についているのです。⁹

セイレーンはギリシャ神話に登場する海の生物で、上半身は女性、下半身は鳥あるいは魚の姿をしており、現代にいたるまで頻繁に絵画や彫刻のモチーフになっている。美の化身と言われるアプロディーテが海から生まれたように、ギリシャ神話では水は美しい女性を生み出す必要不可欠な要素のひとつとなっている。海から生まれたアプロディーテが自分の美しさを世界一だと認めさせるために使った力がトロイ戦争の原因となったように、その美しさは魔性としばしば結びついており、人々を死へと至らしめる要因ともなっていた。このように水と関係する女神やニンフ達は人を魅了すると同時に破滅させ、死に導くという役割を担っていたのである。

さらに2部構成になっている『オデュッセイア』の前半で、オデュッセウスはトロイ戦争後、故郷イタケーに帰るまで困難を極めた航海を続け様々な島で神々や怪物と出会う。なによりも彼が故郷に帰れず厳しい航海を続けなければならなかった理由は、海を支配する神ポセイドンにあった。たどり着いたある島で、オデュッセウスは自分の部下達をポセイドンの息子の犬男、ポリュペーモスという一つ目のキュクローブスに食べられてしまう¹⁰。海だけではなく地下水や泉という水に関係するあらゆるものを支配しているポセイドンの息子は、セイレーンやマーメイドの人間を破滅させる魅力とは異なった暴力的な行為ではあるが、同様に人間を死に追いやるのである。その後ポリュペーモスの食事として岩穴に閉じ込められたオデュッセウスは、残りの部下たちの助けをかりて、熟したオリーブの棒をポリュペーモスの目に差し込み、目玉を火で焼きってしまう。そのような息子に対するオデュッセウスの行為に激怒したポセイドンは、ゼウスの許しを得て彼の帰国を容易には許そうとしない。これらの挿話を考慮すると『オデュッセイア』は、水無くしては成立しない物語であり、水が彼

を数々の苦難へと陥れたと言える。

しかし、『オデュッセイア』には水のもうひとつの側面が描かれている。物語の後半でオデュッセウスは故郷イタケーにたどり着くが、彼の守護神となっている女神アテーネーから身分をあかさないように言われ、貧しい老人に姿を変えられる。そして、自分の主人だと気づかない忠実な豚飼いエウマイオスに連れられて、オデュッセウス自身の館へ赴くが、彼らは途中で泉の前を通りかかる。

岩道を進んで、町の近く、町の人がそこから水をくむうるわしい流れの見事な泉に着いた。 […] まわりには、泉をぐるりと取り巻いて湿地に育つ白柳の繁みがあり、頭上の岩から冷たい水が流れ落ち、そこを通る人すべてが供え物をするニンフの祭壇が上の方に作ってあった。¹¹

女神たちは自分達で支配していた自然界の川や木や山など美しいものや場所に自らの靈魂を埋め込み、それがニンフになったと考えられていた¹²。ニンフは半神半人の若い女性たちで海のニンフたちはネーレイデス、川は谷に住むのはオレアドと呼ばれていた。古代ギリシャでは湧き出す水は神聖なものとして敬われ、町なかにも祭壇があり、通りがかったすべての人が供え物をしていた。水と関係しているニンフは人々にとって非常に身近な信仰の対象となっていたのである。

その泉のそばで出会った山羊飼いのメランティオスが、乞食の老人の姿になっているオデュッセウスを軽蔑し罵った時、エウマイオスはニンフに大声で祈る。

泉のニンフ達、ゼウスの娘達よ、オデュッセウス様が豊かな脂身で包んで牡羊や小山羊の太腿を焼いて差し上げたことがあるならば、この私の望みを、願いをおかなえ下さいまし。あの方がお帰りになりますように、神様がお連れくださいますように。¹³

オリンポスの神々に対するようにニンフ達にも生贄が捧げられ、ニンフ達の泉は神殿と同様に願いを祈る場ともなっていた。つまり水は人々に苦難を与えるが、しかしまた加護を祈る対象でもあったのである。それではこのような両義性を持つ水が直接身体とかかわる時、水はどのような効果をもたらすと考えられていたのだろうか。

3. 水と身体

紀元前 443 年ごろ書かれたと考えられるヘロドトスの『歴史』には、「豚はエジプトでは穢れた獣と考えられている。エジプト人は通りすがりに豚に触れるようなことがあると、着物をきたまま河に飛び込んですっかり体を漬けてしまう」¹⁴と記されて

いる。このように水に浸るということは、身体から穢れを払うという行為でもあった。

また、水は遺体と関係しても語られる。紀元前、おそらく 441 年か 442 年に書かれたソポクレスの『アンティゴネ』ではオディプスの娘達が主人公となっている。オディプスは自分の母親とは知らずにイオカステと結婚し、自分の父親を殺害し、母親との間に二男二女の 4 人の子供をもうける。兄弟二人はオディプスが亡くなった後、王位を争ってともに倒れたため、その後イオカステの兄だったクレオンが王位につく。そしてクレオンは、オディプスの息子の一人エテオクレスは母国を護って戦った者として国をあげて最高の葬儀を実施し、亡命からもどり国を攻撃したという理由でもう一人の息子ポリュネイクスの葬儀を禁止し、その遺体を野犬や鳥に食べさせ、さらし者にすることを決定した。さらに、自分の命令に背いた者は誰でも殺害するという命令を下した。だが彼らの妹であるアンティゴネは、その命令に背き番人に捕らえられ、番人はクレオンに次のように訴える。

娘さんもむきだしになった屍を見ると、泣き声をあげて嘆きたてまして、そんな所業を働いた者どもにたいして、激しい呪いをあびせかけたのです。それから両手で、すくいにとって乾いた砂を運んで来て、よくたたきあげた青銅の水差しを高くかけ、三度、きまりのように屍に灌ぎの水をかけめぐらしました。¹⁵

アンティゴネは兄であるポリュネイクスの遺体が無残な姿でさらされ続けるのを耐えがたく思い、決死の覚悟で遺体を浄化させるために水をかけたのである。上記の文章から古代ギリシャでは、水で遺体を清めることは、現世の穢れを払うために死者の葬儀に不可欠の行為であったことがわかる。さらにアンティゴネにとっては、死者に水をかける行為は自分の生死をかけた極限の行動であり、その後彼女は叔父から処刑されたことから、水が持っていると考えられていた浄化の力がいかに大きかったかが理解できるであろう¹⁶。

また、紀元前 414 年か 413 年に上演されたと推測されるエウリーピデースの『タウリケーのイーピゲネイア』の悲劇には次のような言葉がでてくる、父親アガメムノンによって女神アルテミスへの生贄としてささげられた不幸な王女イーピゲネイアは、喉をかききられる間際でアルテミスに助けられ、タウリケーでアルテミスの巫女として神殿で仕えている。彼女の仕事は、エウリケーに落ち延びてくるヘラス（ギリシャ）の男性を生贄にする儀式を始めることであった。ある夜、彼女は自分の故郷のアルゴスの館が大地の激しい揺れで崩壊する夢をみる。

私の感じでは、父の館の太い柱だけが残ри、柱頭は金色の髪をなびかせ、人間の言葉を発したようでした。

そして、私は、異国の人を殺す今の仕事をおろそかにせず、この人は死ぬのだと思って清めの水を降り注いでやりました。泣きながらです。私の解釈では、夢の意味はこうでしょう。

弟のオレステースが死んだ、私は弟相手に生贄のはじめの儀式をしてしまったのだと、と。

男の子というものは館の大黒柱ですし、私の清めの水を身に浴びたものは死ぬことになるのですから。¹⁷

古代ギリシャでは生きた牛や羊や豚、あるいは時には人間は神々への生贄として欠かせないものであった。生贄の儀式として最初に水を振りかけるのは、水は生贄の穢れを清める力があると考えられていたからである。儀式の中には、喉を切られた生贄の血を杯に受け、それを祭壇に注ぐという行為が含まれていた。つまり、その一連の行為は、水で清められた身体がその生贄自身の血へと集約され、神への完全な従順を誓う印として祭壇に注がれ、次いで神の中へと取り込まれ昇華され神を形成する一部となることを示唆している。このように水は生と死、人間と神を隔てると同時につなぐという可逆性を持っていると考えられていたのである。実はイーピゲネイアの予想とは異なってオレステースは死んだのではなく、父アガメムノーンを裏切って愛人をつくりその愛人と共謀して父を殺した母親を父の復讐のために殺害し、故郷を追放され友人とともにタウリケーに逃れてきたのであった。イーピゲネイアはそれを知らないまま、弟を生贄にするために清めの儀式の準備をするようにと勧められたのだが¹⁸、のち彼女は、生贄になる予定の異国の若者が自分の弟だと知り、なんとか二人で逃れる術はないかと熟考し、タウリケーの王トーアスに次のように申し出る。

- トーアス： 清めの水とそなたの剣は用意ができていないのか？
イーピゲネイア： なによりもまず、穢れを落とす神聖な水で二人を清めたいのです。
トーアス： せせらぎの水でか？それとも澄んだ海の水でか？
イーピゲネイア： 海は人の身についた汚辱をすべて洗い流してくれます。
トーアス： そうした上で二人が殺されれば、神の意にかなうももっとも神聖な捧げものができるということだな。¹⁹

上記の台詞から、川の水よりも海の水の方が神聖であると考えられていたことがわかる。オケアノスはガイアと交わり多くの神々を誕生させたことから、海は新たなエネルギーを生み出す無限の力があると古代ギリシャの時代には信じられていた。このように水に身体を浸すことは、生贄の肉体のみならず魂のすべての汚辱を浄化し、神に捧げるのに適正とみなされるために必要な行為でもあったのである。

4. 入浴と神秘

しかし、遺体に水を灌ぐ、あるいは神に捧げる生贄を水や海に浸すのは、その清められる人物が望んだわけではなく、その人物にとっては受動的、あるいは強制された行為にすぎない。それでは、能動的に水で身体を洗う、すなわち沐浴や入浴には、どのような意味が付与されていたのであろうか。ソポクレスの『コロノスのオディプス』では、使者がオディプスの最後について次のように語る。

彼〔オディプス〕はそれから穢れた着物を解いた。娘達をよび、沐浴し、神に捧げるための水をどこか泉から持ってくることを命じた。二人は正面に見える緑の守護の女神デメーテルの丘に行って、わずかのあいだに命じられたものを父親のところに持って来て、定めのごとくに、彼を洗い清め、衣服を改めさせた。²⁰

オディプスはアポロンの神託通りの運命をたどり、自分の生をゼウスに委ねる、つまり死ぬ決意をし、娘達に別れを告げる。神に呼ばれて死者の国へと旅立っていく直前にオディプスが行う最も重要な儀式が水で身体を洗う行為なのである。441 年か 442 年にソポクレス書いた『オディプス王』の中では、オディプスの家について次のように語られている。「イストロスやパシスの大河の水もこの家を洗いきよめることはできまい。それほど多くの禍をこの家は蔵し、またやがて天日にさらすことであろう」²¹。ここでは、オディプス自身が神の掟に背いた罪を水によって洗い清めようとしていたわけではない。オディプス家の罪の深さを弾劾しているのは他人であり、他人である限り大量の水を使ってもオディプス家の罪を浄化することは不可能だと言っているのである。しかし、『コロノスのオディプス』においては、オディプスの意志によって沐浴が行われる。その意志が、オディプス家の娘達が汲んできて父親が身体を洗った水に浸透し、それによってはじめてオディプスは大河の水でも洗い流すことが不可能だった許されない罪をも清めることができ、神々と結びつき許しを得ることが可能になったのである。

さらに、『オデュッセイア』には、何度もオデュッセウスが水や湯で身体を洗う場面がでてくる。当時、異国の旅人を迎え入れ、歓待することはゼウスの教えに従うことだった。例えばエウマイオスは自分の敬愛する主人だと認識できないにもかかわらず、貧しい老人の姿のオデュッセウスに対して最大の歓待をほどこす。なぜならば、「よその人の保護者なるゼウスをおそれ、またあなた自身を憐れと思うから」²²である。エウマイオスのように貧しい奴隷の地位の者だけでなく、王位につく権力者も旅人を歓待した。一般的には、まず旅人に入浴を勧め、その後神々に牛や豚の生贄をささげ、旅人とともにふんだんな食べ物やワインで他の大勢の客達とともに食事をするという流れであった。オデュッセウスはアルキノオスが支配する国に漂着するが、そ

の時女神アテーネーはアルキノオスの姫ナウアシカーにオデュッセウスを歓待するように、という夢をみせる。その後オデュッセウスに出会ったナウアシカーは、彼に父の城へ行く前にまず川の流れて身体を洗うように勧める。

すっかり身を清めて油を塗りこんで、清浄な乙女がくれた着物を纏うとゼウスの姫アテーネーは彼〔オデュッセウス〕を前よりもっと丈高く逞しく見えるようにし、頭からはヒヤシンスの花のようにふさふさとした髪が垂れるようにした。〔…〕女神は彼の頭と肩に美を注ぎかけた。彼が海辺に行き、離れて座ると、美しく優雅に光輝いた。²³

オデュッセウスを守っているアテーネーは、彼の身体を変貌させるが、それは背丈、髪、頭、肩とほぼ全身に及ぶ。「美しく優雅に光り輝く」身体は、もはや人間ではなく神域にまで達していると言える。このように身体を洗うという行為は、神々の奇跡と密接に結びついており、その力によって清浄になった身体は本来よりも抜きん出た美しさや高貴さが与えられ人々を魅了するのである。

入浴によって神々しい美しさを手に入れるのはオデュッセウスだけではない。彼の父親のラーエルテースは、息子を失ったと信じ、城での生活を捨てて田舎に移り住み生活を営んでいた。妻の求婚者達を殺害した後、オデュッセウスは父の家を訪ね、父は息子との再会を喜び、食事を共にする前に入浴する。

するとアテーネーが近づいて、軍勢の牧者の体を大きくし、見るからに前よりも丈高く頑丈にした。風呂から出てくると、不死の神々にも似た姿を目の前にして、愛息子は父に感心し、呼びかけて翼ある言葉を言った。

「父上、きっとどなたか永遠におわす神が、父上の姿と身の丈とをみるも見事になさったにちがいありません」。²⁴

ラーエルテースの姿の変化はアルキノオスの国でのオデュッセウスの変化よりもさらに大きい。アテーネーは彼にオデュッセウスの時のような美しさを付与するのではなく、支配者の地位に返り咲いた勇敢な息子の父親にふさわしい身体の頑健さを与える。その頑健さは「不死の神々」に通じるものであり、息子のオデュッセウスの口から発せられた、神が父親をふさわしい姿に変えたのだという言葉から、入浴は神々の神秘性と直接的に結びつく行為だとオデュッセウス自身が理解していたということがわかる。

ただし、オデュッセウスがイタケーに戻った物語の後半では、オデュッセウスの入浴に変化が見られる。彼の息子テーレマコス、父を探しに異国へ行ったのち、父に

出会えないままにイタケーに帰る。そこで豚飼いのところにいる老人が自分の父オデュッセウスの仮の姿であることを、父から直接聞く。長年待ち望んでいたイタケーに帰りついたオデュッセウスは妻ペーネロペイアの傍若無人な求婚者達を息子と共に殺害し復讐を果たすことを決意する。その後、オデュッセウスは身分を隠したまま、テーレマコスの客人として、自分の館で息子と入浴する。

居心地のよい館に着くと、大椅子や子椅子にマントを脱ぎすてて、磨き上げた風呂に入って入浴した。彼ら（父と息子）を婢女達が洗い、オリーブの油を塗り、下着と毛皮のマントを着せると、風呂から出て椅子に座った。手洗いの水を婢女がうるわしい黄金の水差しに持ってきて、洗うように、白銀の水甕に注ぎ、磨き上げた卓をかたわらにしつらえた。²⁵

ここでの入浴には神の関与は見られない。だが、この入浴後に彼らの人生は大きな転機を迎える。入浴前までオデュッセウスは神々に翻弄され、テーレマコスは母の求婚者達から侮辱され暗殺を企てられるというような、受動的な人生を歩んできた。しかし、この入浴を境として、父と息子は求婚者達から奪われそうになっていた本来の自分たちの館や財産を取り戻し、自信に満ちた王及びその跡継ぎとして再生するのである。入浴する時のすべての道具に「磨き上げた」「黄金」「白銀」という輝きを与える言葉が使用されているが、それは彼らが長い間希求していた復讐の成功と、彼らの未来の輝きを象徴していると考えられる。

また、この物語には入浴に関する別の印象深い場面がある。イタケーの城で、ペーネロペイアは、年老いた貧しい老人が夫のオデュッセウスだとは見抜けないまま、オデュッセウスの乳母だったエウリュクレイアに歓待の意をこめて彼の足を洗うように言いつける。足を洗う前にエウリュクレイアは驚くべき言葉をオデュッセウスに投げかける。「大勢の旅につかれたよそのお人がここに来ましたが、あなたほどその姿、その足がオデュッセウス様にそっくりな人は見たことがありませぬ」²⁶。アテーネーに乞食の老人の姿にかえられたのち、オデュッセウスが自分で告白しない限り、息子も妻も忠実な召使たちも彼をオデュッセウスだと気づかなかったにもかかわらず、エウリュクレイアは老人の足がオデュッセウスの足に似ていると指摘するのである。その類似をオデュッセウスが否定しても、彼女は足を洗ううちに彼が主人であると確信する。

老女は近づいて、主人の足を洗いすぐ傷に気付いた。〔…〕

老女は手で足を取り、上から下にさするうちに、この傷に触れて、はっと気がつき、足をはなした。〔…〕 歓喜と悲痛が心をとらえ、両の眼は涙にあふれ、のどが

つまって声もでなかった。オデュッセウスのあごにふれて、老女は言った。

「ほんとうにオデュッセウス様です、いとお子！それなのに、ご主人の体中さわってみなくてはわからなかったとは！」²⁷

ここでも女神アテーネーの神的な力は何も働いておらず、足の傷に気付いたのはエウリュクレイア自身である。彼女は、アテーネーがオデュッセウスを神々しく見せるようが、貧しい老人の姿に変えようが、彼自身の身体の過去の傷によって主人だと気づく、換言すれば、幻影に惑わされない人物なのである。そしてまたエウリュクレイアという他者からオデュッセウスだと認識されたことによって、オデュッセウスは自分の本来の身体を取り戻したとも言える。それに呼応するように彼は、自分を困難に陥れる神々の力から自由になり、自分の意志で実行したかったことを実現していくのである。

オデュッセウスはテーレマコスとともに求婚者達を殺戮した後、再び入浴する。

大いなる心のオデュッセウスをその館で女中頭のエウリュノメーが洗い、オリーブ油を塗り、下着と美しいマントを着せた。すると、アテーネーは頭から美をいっぱい注ぎかけた。以前より丈高く逞しく見えるようにし、頭からはヒヤシンスの花のようにふさふさとした髪の毛を垂れるようにした。ちょうどヘーパイストスとパラス・アテーネーとがありとあらゆる技を授けた匠が銀地に黄金をかけて、すばらしい品を作り上げるように、そのように女神は彼の頭と肩に美をそそぎかけた。彼は風呂から不死の神のような姿で出てきて、元の席の大椅子に後に面して再び座り言葉かけた。²⁸

この場面では、入浴自体というよりもいかにアテーネーが入浴後の彼に「美」を注いだかが詳しく語られている。「丈高く逞しく見えるようにし、頭からはヒヤシンスの花のようにふさふさとした髪の毛を垂れるように」という表現は、オデュッセウスがアルキノオスに会う前に川で身体を洗った時と同様であるが、彼はさらに神と同等の威厳さえ有する姿に例えられる。しかし、アルキノオスの国での入浴と異なっているのは、そのようなすばらしい姿にオデュッセウスを変貌させたアテーネーの力が、妻のペーネロペイアには全く通じない点である。この入浴後、彼女はオデュッセウス自身から自分が夫だと告白されても頑なにそれを信じようとしない。彼女もまた神によって簡単に換えられる外見に惑わされない人物なのである。彼女がオデュッセウスを夫だと認めるのは、彼が夫婦二人しか知らない寝室の秘密を知っていたからである。つまりペーネロペイアは神が換えなかった内面によってオデュッセウスを夫だと判断するのだ。

このように『オデュッセイア』の入浴の場面に注目すると、オデュッセウスが神々の意志に翻弄されている前半においてはアテーネーの神秘的な力が十分に発揮されるが、オデュッセウスが自分の意志と行動でイタケーの王に返り咲く物語の後半では、女神の力は弱まり地上の女性、彼の妻や乳母の聡明さが前面にでてくることがわかる。そしてまさに入浴は物語を進行させる重要な契機のひとつとなっているのである。

6. 終わりに

古代ギリシャ文学における入浴の象徴性は、その後明確に二分化していく。例えば『新約聖書』の「ヨハネによる福音書」第5章第3-4節では、盲目や病気の人たちが、治癒力があるとされるエルサレム外壁の前の羊の門のそばにあるベトザタ池に身体を横たえていたと書かれている。ベトザタとは「恵みの家」という意味で、主の使いがこの池に降りてきて水を動かすことがあり、その時に池に入ると病気がよくなると信じられていた。つまり、水に身体を浸すことと神の奇跡は密接に結びついていたのである。他方、古代ローマ時代には公共浴場が非常な人気を呼ぶようになり、カラカラ帝はローマ市内に様々な嗜好を凝らした大浴場を建設した。その後の皇帝たちも市民の関心をひきつけるために、浴場を作りその数は千にも及んだと言われている。入浴は健康を増進させるだけでなく、商談、社交またダンサーや芸人たちによる娯楽と結びつき、神が奇跡を起こす聖なる行為だという考えはほとんど見られなくなっていく。

本論は、古代ギリシャに限定して文学における入浴の表象を問うたものである。その後医学の発達とともに、とくに温泉を使用した入浴は現代にいたるまで様々な変容を遂げていく。そのことを考慮してヨーロッパ文学における温泉を中心とした入浴の特異性を今後の課題として考察していく所存である。

註

- 1 ポセイドンや彼に仕える祭司たちは、食欲に地上の王国を欲しがり、女神たちからその土地を奪おうとした。特にポセイドンはアムピトリテという女神と結婚するふりをして彼女をニンフに格下げしたり、ヘーラからアルゴリスをアテーネーからアテネを奪おうとした (Barbara G Walker, *The Woman's Encyclopedia of Myths and Secrets*, Harper Collins, 1983, p. 807 [バーバラ・ウオーカー、『神話・伝承辞典』、山下主一郎主幹・青木義孝他訳、大修館書店、1988])。
- 2 岡村民夫、『イーハトーブ温泉学』、みすず書房、2008年、38-39頁。

- 3 Voir Alvec Lytle Croutier, *Taking the waters : spirit, art, sensuality*, Abbeville Press, New York, London, Paris, 1992 (アルヴ・リトル・クルーティエ、『水と温泉の文化史』、武者圭子訳、三省堂、1996年)。
- 4 Voir Vladimír Krížek, *Kulturgeschichte des Heilbades*, Edition Leipzig, 1990 (ウラディミール・クリチェック、『世界温泉文化史』、種村季弘・高木万里子訳、国文社、1994年)。
- 5 ヘシオドス、『神統記』、廣川洋一訳、岩波書店、1984年参照。アポロドーロス、『ギリシャ神話』、高津春繁訳、岩波書店、1953年参照。
- 6 バシュラルは、水を前にしたナルシスは、自分の同一性と二重性、男性と女性、現実と観念を同時に感じると指摘している (voir Gaston Bachelard, *L'eau et les rêves: essai sur l'imagination de la matière*, Librairie José Corti, 1942, p. 34 [ガストン・バシュラル、『水と夢』小浜俊郎、桜木泰行訳、刻文社、1969年])。
- 7 *The Woman's Encyclopedea of Myths and Secrets*, op. cit., pp. 1047-1048.
- 8 *Ibid.*, pp. 651-652.
- 9 ホメーロス、『オデュセイア』、高津春繁訳、「ホメーロス、世界文学大系 1」、筑摩書房、1961年、86頁。
- 10 「彼〔キュクロプス〕は二人の人間をばらばらに切って、夕食にし、まるで山に育った獅子のように、はらわたも肉も髓にみちた骨も何一つあまずところなく食べつくした」同書、63頁。
- 11 同書、120頁。
- 12 *The Woman's Encyclopedea of Myths and Secrets*, op. cit., p. 732.
- 13 『オデュセイア』、前掲書、121頁。
- 14 ヘロドトス、『歴史』、松平千秋訳、筑摩書房、1967年、85頁。また2巻64には「聖域内では女と交わらぬこと、また女と触れたものは沐浴してからでなければ聖域には入らぬという戒律を定めたのは、エジプト人が最初である」と書かれている (同書、90頁)。
- 15 ソポクレス、『アンティゴネ』、呉茂一訳、ギリシャ・ローマ古典劇集、筑摩書房、1959年、88頁。
- 16 アンティゴネーとクレオンの対立は、ギリシャ悲劇にしばしばみられる。それは神話及び宗教の世界と人間によって支配される世界の対立そのものであり、クレオンにとってノモスは自分が発する法であり、アンティゴネーにとっては神々の法であると、シェールは指摘している (René Schérer, *Zeus Hospitalier : éloge de l'hospitalité*, Armand Colin, 1993, p. 26)。

- 17 エウリーピデース、『タウリケーのイーピゲネイア』、久保田忠利訳、岩波書店、2004年、21頁。
- 18 同書、41頁参照。
- 19 同書、111-112頁。
- 20 ソポクレス、『コロノスのオディプス』、高津春繁訳、ギリシャ・ローマ古典劇集、筑摩書房、1959年、158頁。
- 21 ソポクレス、『オディプス王』、高津春繁訳、ギリシャ・ローマ古典劇集、筑摩書房、1959年、126頁。
- 22 『オデュセイア』、前掲書、101頁。シェールはキリスト教の隣人愛は、古代ギリシャのゼウスの歓待の精神と関係があると指摘している（*Zeus Hospitalier : Éloge de l'hospitalité*, op. cit., p. 24）。
- 23 『オデュセイア』、前掲書、45頁。
- 24 同書、168-169頁。
- 25 同書、119頁。
- 26 同書、138頁。アウエルバッハは『ミメシス』の中でエウリュクレイアがオデュッセウスの足の傷によって、貧しい老人が自分の主人だと気づいた場面と『旧約聖書』のイサクの生贄の場面とを比較し、『オデュセイア』は、歴史的発展や人間的・問題的な要素の乏しさ、『旧約聖書』は歴史の展開に関する概念の形成や問題性の深化が見られるが、この二つの文体がヨーロッパ文学の描写に影響を与えたと結論づけている（Erich Auerbach, *Mimesis*, Francke Verlag Bern, München, 1946, pp. 5-27. [アウエルバッハ、『ミメシス』、篠田一士・川村二郎訳、筑摩書房、1967年]）。
- 27 『オデュセイア』、前掲書、138-139頁。
- 28 同書、161頁。